



昭和大学
SHOWA University

—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療
先進的医療の推進
良き医療人の育成

発行責任者 病院長 馬場 一美
編集責任者 広報委員長 長谷川 篤司
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1

TEL 03-3787-1151 (代表)

ホームページ: <https://www.showa-u.ac.jp/SUHD/index.html>

コロナ禍と子どもの発達

小児歯科 診療科長・教授 船津 敬弘

新型コロナウイルス感染症の終息がみられない中、5月8日から季節性インフルエンザなどと同じ感染分類である「5類」に移行するという報道がありました。行動制限はなくなり、マスクの着用も原則個人の判断に委ねられるようです。長いコロナ禍もようやくトンネルの先が少し見えてきたのかもという気もしています。

しかし、この長いコロナ禍において、子ども達の発達に関しては気になる研究成果が報告されています。アメリカのブラウン大学が幼児（0～3歳）を対象に2011年～2021年にかけて行った研究ですが、「親の声を認識するか」「簡単な指示を理解するか」などの反応から、子どもたちに認知の発達度合いに対する点数付けをしたところ、コロナ禍で生まれた子どもは発達の度合いにばらつきが出たことが分かり、発達の遅れがみられる子が増えている可能性を示していました。

コロナ禍で子どもが家の中にいることが多く、そのために認知的な刺激を受ける機

会が少なくなるとともに、外の世界との交流が制限されたことが原因の一つと考えられています。これはアメリカのデータで、日本よりもマスクの装着率は低い中でのデータになります。

日本では外に出ても殆どの方がマスクをしており、顔の表情は見えにくく、表情から相手の心理状態を読み取ることは大人でも難しい状況です。ましてや認知能力が十分でない子どもであれば尚更で、外での交流だけでは子どもの発達を促す環境として、足りないことも考えられます。ですから家の中ではマスクをとって、ご家族のさまざまな声かけとともに、いろいろな表情や仕草を見せてあげることが子どもの発達には大切になります。

コロナ以前のように、マスクを外して笑うことができる日が、一日も早く来ることを望んでやみません。



- P1 巻頭言 コロナ禍と子どもの発達
- P2 診療科紹介 小児歯科
- P3 診療科紹介 障がい者歯科
- P4 部署紹介 リハビリテーション室
- 編集後記

記事見出しの色分けをいたしました。

患者さん向け、医療機関向け、お知らせなど

診療科紹介：小児歯科

小児歯科 診療科長補佐・講師 浅川 剛吉

小児歯科では、子どもたちのために専門の知識と技術をもったスタッフ、技術を学んでいるスタッフが保護者の方々と共にお子さんの口腔の健康維持に尽力し、子どもたちの笑顔とともに成長のサポートを行います。

小児期の口腔内は乳歯から永久歯へ変化し、顎の成長発達も顕著でダイナミックな変化をいたします。また、さまざまな口腔機能の獲得にも大変重要な時期（発達期）です。

子どもたちの口腔の機能と構造を健康に保ち発達期にしっかりと成長することで（図1）、生涯を通じて美味しく食事を楽しむことができるようになります。それは全身の健康へもつながります。

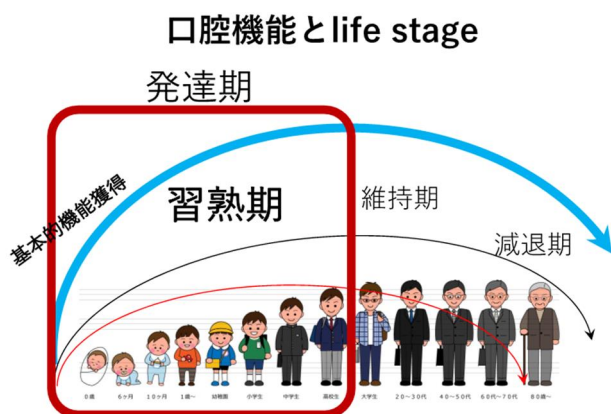


図1

その為に、お子さんの歯の治療、予防、成長発育状態についての定期的な口腔診査をお勧めいたします。

主な診療内容は、むし歯の治療・予防、口腔外傷、口唇口蓋裂、舌小帯や上唇小帯・その他の軟組織疾患、歯の萌出の問題、埋伏過剰歯などの歯数の異常等、0歳児～成人以下の口腔内に関する疾病全てが対象になります。さらに近年は口腔内スキャナを用いた歯

などの型取り（光学印象）や、審美的、機能的な歯冠修復物の製作（図2）にも取り組んでおります。

乳臼歯の審美的歯冠修復



図2

また、歯科治療が怖いお子さんにもさまざまな工夫、対応方法を駆使して恐怖心を和らげて、快適に診療ができるように、各専門診療科とも連携を図り診療しています。

特に、全身疾患がある、発達障害があるなどさまざまな事由で外来での診療が困難な場合や、埋伏過剰歯の抜歯などの外科処置は、全身麻酔下での治療も行っています。

お近くの歯科医院にて歯科診療が上手に受けられずお困りの場合にも対応いたしますので、まずはご相談ください。



小児歯科スタッフ

歯科診療トピック 障がい者歯科

障がい者歯科 診療科長補佐・助教 嘉手納 末季

【全身麻酔での集中歯科治療】

障がい者歯科は、歯科診療に対し特別な配慮が必要な方々の歯・口の総合的な診療科になります。知的障害、自閉スペクトラム症、脳性麻痺、染色体異常、四肢体幹障害、統合失調症、筋ジストロフィー、脳血管障害、認知症など、さまざまな障害や疾患のある方を対象に診療を行っています。障害のある方にとって、お口に関連したさまざまな問題は解決することが容易ではないことが多いかと存じます。

当科では、治療が必要な歯の本数や治療にかかる時間、治療の内容や精神的な影響などを考慮して全身麻酔による集中歯科治療を行っています。外来での歯科治療と同様に全身麻酔下でも、神経の治療や詰め物をする治療、冠を被せる治療などを行います。

また、親知らずの抜歯や過剰歯の抜歯も行っております。治療の内容や本数によって、全身麻酔下での治療を複数回に分けて行うこともあります。全身麻酔を行うことにより、歯科治療へのストレスが軽減されたり、体動や反射が起きなくなるため、安心して質

の高い治療を受けていただくことができます。

全身麻酔を用いた治療の流れですが、治療方針の決定後、術前診察を行います。歯科麻酔科医による診察と全身麻酔についての説明があり、看護師からは入院についてお話しをさせていただきます。その際に心配なことなどございましたら直接相談いただくことができます。その後、全身的な検査を行います。具体的には、胸のエックス線写真や血液検査、尿検査、心電図検査などになります。

全身麻酔の当日は朝食をとらずに来院していただき、朝の診察ののち手術室に移動し、点滴からお薬を流す、もしくはマスクでお薬を嗅ぐとすぐに眠った状態になります。全身麻酔での歯科治療終了後は1～2時間程度ベッドで休んでいただき、環境の変化などを考慮した場合には夕方にはご帰宅できるようにしています。

歯科診療を受けること自体が難しくお困りの方がいらっしゃいましたら、スタッフ一同、誠心誠意、対応させていただきますので、どうぞお気軽に昭和大学歯科病院障がい者歯科を訪ねていただければと存じます。



全身麻酔での集中歯科治療の様子



障がい者歯科 スタッフ

部署紹介：リハビリテーション室

リハビリテーション室 武井 良子

「発音の問題」でお困りの方の相談・治療は、ことばの専門家である言語聴覚士2名が担当しています。また、指しゃぶりや舌癖などの口腔異常習癖については、月1回口腔筋機能療法（MFT）も行っています。

「発音」は、お口の重要な機能のひとつです。私たちは普段何気なくおしゃべりをしていますが、発音の問題があるとうまく言いたいことが伝わらず困ることが出てきます。

「発音の問題」は、さまざまな原因によって生じますが、当院には以下のような患者さんが多くいらしています。

口腔がん術後：舌がんなどの手術後に、変化したお口の状態に合わせた話し方を身につけるため練習を行います。また、必要な方には特殊な義歯（舌接触補助床など）を作製するなど歯科医師と言語聴覚士が連携して対応しています。

機能性構音障害：医学的に明らかな原因がないのに上手に発音できない音がある状態をい

います。お子さんで多いのは、いわゆる「赤ちゃんことば」です。自然に上手になることも多いですが、小学校入学前になってもよくなる場合には言語聴覚士による練習を行います。また大人で、仕事や学業で困るようになり、受診される方も多くいらっしゃいます。

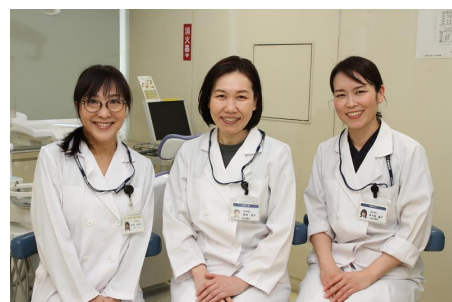
舌小帯短縮症：舌の裏のヒモ（舌小帯）が短いために舌が自由に動かず、発音の問題を伴うことがあります。手術で舌小帯を伸ばすだけでは発音の問題が解決しないことも多いため、手術前と手術後に言語聴覚士がトレーニングを行います。

口唇口蓋裂：声の鼻漏れがある場合には、必要に応じて特殊な装置（スピーチエイド）を歯科医師が作製し、言語聴覚士が発音の指導を行います。

言語治療の相談窓口は、当院3階の口腔機能リハビリテーション科です。ことばのことでお困りの際は言語聴覚士にご相談下さい。



発音改善のための装置：舌接触補助床（左）、バルブ型スピーチエイド（右）



リハビリテーション室スタッフ

編集後記

新年が明けて大寒波が日本列島に到来し、1月末には東京でも雪が舞いました。2月に入ると急に最高気温が14度になる日中暖かい日も出てきましたが、朝夕の寒暖差は激しく、また、インフルエンザも流行っていますので、どうぞお体には十分気を付けてお過ごしください。（M.N）

